

学術論文

東濃方言における順接の接続助詞「ニ」の 使用傾向に関する検討

安 藤 智 子

富山大学人文科学研究第 77 号抜刷

2022年8月

東濃方言における順接の接続助詞「ニ」の使用傾向に関する検討

安藤 智子

1. はじめに

日本語共通語では、原因・理由を示す接続助詞としては「ノデ」「カラ」が一般的であるが、国立国語研究所（1989-2006）『方言文法全国地図』（以下、GAJ）等の調査から、岐阜県や愛知県の方言では「カラ」があまり使われないことが知られている。岐阜県東濃西部方言では接続助詞「(モン) デ」「ニ」が多く用いられるが、ほとんどの場合「デ」系が使用可能である。一方の「ニ」については原因・理由を表す用法としての使用は「デ」ほど多くなく、主節のモダリティによる制限があることが知られている。本稿では、特に「ニ」の原因・理由以外の用法との関係から、使用傾向について考察する。

2. 1. 美濃・尾張方言における原因・理由を示す接続助詞

1979年から1982年に実施された調査に基づくGAJの第33図を見ると、「雨が降っている[から]行くのはやめろ」の「から」に当たる助詞は、岐阜県・愛知県・三重県と静岡県西部で「デ」が優勢であり、長野県でのみこれに「ニ」を併用する地点が多い。時代を下って2010年から2015年にかけての調査をまとめた大西編（2016）『新日本言語地図』でも、やはりこれらの地域ではほとんど「デ」となっており、長野県の「ニ」の出現域は縮小しているように見える。

また、彦坂（2000）は、GAJとともに近世の方言文献を資料として、歴史的な考察をおこなっている。それにより、「デ」と「ニ」について、「まず、考察範囲の東部、美濃・伊勢地方では、近世期からデが広く分布した。それ以前は、近世の伊勢のニが注意され、かつてはこの地域以東にニがあった。その後デが勢力を得てニを駆逐したのであろう」（彦坂 2000: 12）と推定している。

以上の文献からは、岐阜県・愛知県ではすでに「ニ」は「デ」に駆逐され、消滅しているかのように読めそうであるが、実際には現在でも「ニ」が使われることがある。以下にその記述を紹介する。この地域の原因・理由の助詞については、芥子川（1971）や南（1975）、彦坂（1991）の研究があり、いずれも、主なものとして「(モン) デ」¹⁾、「ニ」を挙げている。

芥子川（1971: 213-216）では、江戸時代の文献資料に基づいて、「デ」が「によって」「から」の意で「京阪や江戸ではあまり多くは用いられなかったものらしい」が、江戸時代の名古屋ではその意味で「最も頻繁に用いられ」たことを指摘している。一方、「ニ」には4つの用法が

あるという。そのうちの1つ目として、「によって」「から」のように「原因、理由、または後続の述語の条件となるものを提示する意」で用いられるとし、その例として、(1) (2)などを挙げている((1) (2)は芥子川(1971: 213)より例を抜粋したもの)。

(1) 大きな声せるな。人がたかるに。(料理蝶斎(1800)戯作「女楽巻」),

(2) おれがこふつくばっておるに, かたぐるまにのりなさい。(石橋庵真酔(1816)戯作「滑稽祇園守」)

「ニ」の2つ目の用法は「のに」に相当する逆接の接続助詞であり、例として(3)を挙げる(抜粋)。

(3) …切れるきれんハ、けふあつて、うぬが心をためしたうへと心を定めて来ておるに, そんな水くさいどこんぜうとハしらなんだ。(石橋庵真酔(1805)戯作「南浜野圃玉子」)

3つ目に挙げられたのはコピュラの連用形であり、助詞ではないという点で他の用法とは性質が異なるものである。

4つ目の用法は、「文末にあって、余情を添えるもの」とされ、(4) (5)などの終助詞的な用法の例を挙げる(抜粋)。これについて芥子川(1971: 214f)は、「実際はこの助詞に後続することばが省略されて、それを聞き手に推察させるというものである」と述べ、波線部のような意味を持つとしたうえで、「終助詞的な要素もふくんではいるが、なお接続助詞とみるべきである」と述べている。

(4) なんでも、せんりやうさは、おふミヤで、はつけ見さしたときであつたに。(=なんでもせんりやうさ(八卦見の名)が近江屋で八卦を見さした時だったよ。ネそうでしょう)
(資料不詳)

(5) それミよ。しりはおれにふかせるつもりだに。(=それみろ、尻はおれにふかせるつもりだに²⁾。お前というやつはとんでもないやつだ) (模釈舎(1804)戯作「駅客娼穿」)(以上、訳、下線、波線は芥子川による)

南(1975: 259f)では、「岐阜・愛知(とくに尾張地方)など」において、「デ」は「主文のどんな述語とでも共存できる」のに対し、「ニ」は「勧誘・意思あるいは命令(禁止)」の述語とは共存できる」が、「カサ モツテクワ」「カサ モツテッタ」「ソナ トコ イケセン」といった主文の前で「アメガ フルニ」などと言うことはできないとしている。この指摘は、上述の芥子川(1971)が1つ目として挙げた原因・理由を表す「ニ」の用例が、命令・禁止など聞き手になんらかの行為の実現を求める、「働きかけ」のモダリティの主文を持つものに偏っていることを説明しうる。

彦坂(1991)の東海西部の地域(岐阜県美濃地方・愛知県全域に加え、そこに接する三重県・長野県・静岡県の一部)の調査でも、「雨が降っているから行くのはやめた」の「から」に当たる部分としては、「デ」が非常に優勢であり、一部に「モンダデ・モンデ」が現れるという

分布である。一方、「雨が降っているからいくのはやめろ」の「から」に当たる部分としては、調査地域全域で「デ」との併用で「ニ」が多く現れている。ここからも、「ニ」が用いられるのは、主節が働きかけのモダリティの場合であると考えられる。ただし、この併用のほとんどの地点で「主要な」（彦坂 1991: 26）形式は「デ」である。GAJ 第 33 図に比べると「ニ」の使用地域が西に広がっていることになるが、この違いは、併用する形式を尋ねたり、誘導したりすることによって、優勢な形式以外の形式も発掘しようとした彦坂の調査方法によるものであろう。さらに、「頼むからやめてくれ」の「から」に当たる部分については、「デ」も見られるが、調査地域全域で「ニ」と即答する機会が多くなったとしている。これについて彦坂（1991: 27）は、「頼ムニ」が決まり文句的に口をついて出る表現であることが「ニ」の出現率を高めていると考えられる」と述べている。

2. 2. 東濃方言における「デ」「ニ」

東濃方言の原因・理由を表す接続助詞については、曾根（2000）と山田（2002, 2006）の 3 件の主な先行研究がある。

山田（2006: 137-139）は、東濃地方の方言資料の用例に見いだされる、原因・理由・判断の根拠を示す接続表現として「デ」「モンデ」「モンヤデ」「モノ系 他の表現」（モンモノ、モンダイ、モンダカラ）、「ニ」「テ」の接続助詞のほか、「接続詞」として「そうやで」「ほやもんで」などの「デ」「モンデ」を内蔵する表現と、「ケ」「カラ」などの 1 例ずつの例を挙げている。このうち、「デ」を「もっとも一般的な原因・理由の接続助詞」とし、「ニ」については、南（1975）の記述や彦坂（1991）の結果と同様に、「後件に働きかけの表現をとる」と述べている。

曾根（2000）は、東濃西部の中央に位置する土岐市の方言における接続助詞「デ」「ニ」について、自然談話およびアンケート調査をもとに考察している。それによれば、自然談話では、理由を表す「デ」の出現が 36 件に対して、「ニ」の出現が 2 件と非常に少ない。また、「ニ」について自然な文として使えるかどうかを問うたアンケート調査では、用法と年代による違いを表 1 の形で報告している。

表 1：「ニ」従属節に対する主節のモダリティと年代：「自然」回答の割合（曾根 2000: 149f）

	文	主節のモダリティ	20～30代 (7人)	40～50代 (11人)	60代以上 (14人)
①	雨が降ルニ、傘持ッテクワ	(意志)	28.6%	9.0%	35.7%
②	風が吹クニ、ソナトコ行カヘン	(否定意志)	28.6%	36.4%	57.1%
③	雪が降ルニ、長靴ハイテ行コマイ	(勧誘)	57.1%	54.5%	71.4%
④	台風が来ルニ、早ヨ帰ッテリヤー	(命令)	71.4%	72.7%	71.4%
⑤	雨が降ルニ、外行キヤースナ	(禁止)	85.7%	81.8%	100.0%
⑥	今日ハ寒イニ、雪ガ降ルヤラー	(推量)	57.1%	36.4%	28.6%
⑦	大雨ガ降ッタニ、川ニ大水ガ出タ	(自然現象)	14.3%	18.2%	14.3%

表1のアンケート結果からは、主節が働きかけのモダリティに属する③～⑤で「自然」との回答の割合が高くなっており、南(1975)の美濃・尾張方言についての指摘と一致する。しかし、働きかけには該当しない①、②、⑥、⑦でもまったく受け入れられないわけではないようである。特に、②の60代以上と⑥の20～30代では南(1975)等の指摘から得られる予測に反する「自然」という回答が50%を超えている。

こうしたアンケートの難しい点として、回答者がどのような意図でその回答を選んだのかが定かではないということが挙げられる。例えば、②の文は、「[風が吹くのに、そんなところへ行く]などということはない」というように、芥子川(1971)が「ニ」の2つ目の用法として挙げた逆接の意味で解釈される可能性もある。また、母語話者である筆者(安藤)の感覚としては、理由の用法での⑥、すなわち「今日は寒いから、雪が降るだろう」の意の後に「だから傘を持って行け」といった働きかけのモダリティの文が後続する場合、あるいはその発話意図を含みつつ省略されたものとしてなら、自然に感じられる。さらに⑥は、「ニ」を接続助詞としての自然下降イントネーションから上昇イントネーションに変えたとすれば、共通語の「よ」のような終助詞と解釈され、「今日は寒いよ。きっと雪が降るだろう」といった意味の文となる。このように、こうしたアンケート結果については、慎重に検討する必要がある。

山田(2002)は、東濃を含む美濃地方の方言資料ならびに臨地調査の結果にもとづいて原因・理由表現を分析し、「デ」や「モンデ」系が多数出現するほかに「ニ」もわずかに用いられることを報告している。

「ニ」については、「雨降るとるに出かけてった。」の例を挙げ、通常は「逆接の接続助詞「の」に相当するものとして用いられる」ものの、「後件が依頼、命令、勧誘など聞き手の行為を促す働きかけのモダリティの場合、文脈によっていわゆる『理由』の意味(南不二男1975:258)」でも用いられる」としている(山田2002:12)。さらに、方言資料に現れた数例の「ニ」の「原因・理由」の用法について、次のように述べている。

しかし、本当に「(原因・)理由」を表しているのであろうか。前述のとおり、接続助詞「ニ」が用いられるのは後件が依頼、命令、勧誘など聞き手の行為を促す働きかけのモダリティの場合に限られている。この場合、後件の働きかけ表現にとって前件は「原因」とはなり得ない。せいぜい前件は後件における働きかけの「理由」、言い換えれば「根拠」と言えるものでしかない。(山田2002:12)

山田(2002)によれば、「ニ」が使用可能なのは、蓮沼・有田・前田(2001)の「から」「ので」の用法の分類に従うと、(6)～(8)に抜粋例を示す「発言・態度の根拠」「理由を表さない用法」「から」による慣用表現」のいずれかに相当する場合であるという。これはすなわち、主節が働きかけのモダリティである場合ということになる。蓮沼・有田・前田(2001)の説明では、「から」「ので」の用法としてこのほかに「事態の原因」「行為の理由」「判断の根拠」があるが、

山田(2002)の指摘は、この方言における「ニ」の出現例は、これらの「本当に「(原因・)理由」を表している」ものとは異なるということであろう。

(6) [発言・態度の根拠] 危険です {から／ので} エスカレーターで遊ばないでください。

(7) [理由を表さない用法] すぐもどってきます {から／ので} ここで待っていてください。

(8) [「から」による慣用表現] お願いだから、もっとまじめに勉強して。

このうち、「発言・態度の根拠」は、主節が働きかけであり、その働きかけを行うことの根拠が従属節に示される。「理由を表さない用法」とは、蓮沼・有田・前田(2001)によれば、主節が未実現の行為であり、従属節がその主節の行為の実行を促進する情報を表す場合である。「[「から」による慣用表現]とは、この「理由を表さない用法」の一種と考えられるもので、主節内容の実現を容易にする条件を付加したり、実現を強く望む話し手の態度を前置きの述べる表現であるという(蓮沼・有田・前田 2001: 113)。いずれも、主節が働きかけのモダリティを持つ場合である。

山田(2002)は、この分類を踏まえて、それぞれの用法の例文に対して、「使う」「使わない」が聞く」「使わないし聞かない」を選択して回答する形式により、西濃・中濃地域における小規模な調査(5, 6名か)と東濃西部地域における「やや大規模な調査」(33名)をおこなっている。その結果、いずれの地域でも「[「から」による慣用表現]に相当する意味の「ニ」が最も許容されやすいという結果が示された。これは、上述の彦坂(1991)の「頼ムニ」と一致する結果である。さらに、「発言・態度の根拠」「理由を表さない用法」では、倒置により従属節を後置した文(例:「泊まって行きなさいよ。雨が降っているから。」の「から」相当部分を「ニ」で言えるかを問う設問)のほうが、従属節が主節の前にある場合よりも許容度が高いことが示された。

以上の先行研究から、東濃西部において理由を表す「ニ」については、次のことが明らかになっていると言える。

- ・自然談話での出現頻度は低い。
- ・主節が働きかけのモダリティである場合に理由の類を示す接続助詞として用いられうる。
- ・共通語の接続助詞「から」の慣用表現に相当する場合(「頼ムニ」など)に許容度が高い。
- ・倒置により従属節が後置された場合に許容度が比較的高い。

2.3 用言+「ヤデ／ヤニ」の用法と制限

曾根(2000)は、さらに、用言の後に準体助詞「の」を挟むことなくコピュラ「ヤ」が接続し、そこに「デ」または「ニ」が後続する形式の用法の制限について検討している。その結果、この形が用いられる条件として、従属節の主語に聞き手が含まれ、従属節の述語が意志的な行為・

動作を表す動詞の現在形であることを挙げている。例えば、従属節の述語が意志的である(9)は言えるが、非意志的(10)は言えない³⁾。また、形容詞・形容動詞も従属節の述語とならないとしている。

(9) コレカラ出カケルヤデ／ヤニ, 早ヨマワシシヤー (=これから出かけるから, 早く準備しなさい) (曾根 2000: 152)

(10) *風邪ヒクヤデ／ヤニ, 家シ中入ッテリヤー (=風邪をひくから, 家の中に入っていないなさい) (曾根 2000: 155)

(9) の特に「ヤニ」の場合、母語話者である筆者の内省では、「これから出かける」という従属節の内容は聞き手にとって既知である。したがって、共通語訳は「これから出かけるから」より「これから出かけるのだから」のほうがふさわしい⁴⁾。つまり、共通語ではコピュラの前に準体助詞「の」が入る。このとき、聞き手が従属節の主語に含まれるという曾根(2000)の条件を満たすだけでなく、その予定を聞き手が既に把握しているという前提があるということになる。「ヤデ」でもこの解釈は可能であるが、例えば「出かけるのはこれから(もうすぐ)なのだから」というように、聞き手が「出かける」ことは把握していたとしても、把握していない要素(ここでは「これから」)が残っているように感じられる。これに対し、(10)は「風邪をひくのだから」という訳は成立しない。このことは、野田(1995: 224)の「のだから」についての「前件の事態は相手を知っていることに限られる」という指摘と合致する。「ヤデ／ヤニ」が、共通語では現れる準体助詞「の」を意味的に内包するものだとすると、「のだから」と「ヤデ／ヤニ」は、準体助詞+コピュラ+原因・理由の接続助詞という同じ構成を持つものである。

一方、山田(2002)は、対象を「ヤデ」に限定したうえで、従属節の述語が意志的かどうかに関わらず、否定の場合は「ヤデ」が用いられないこと(例文(11)(12))と、肯定で意志的であっても継続相の「トル」を用いた節では「ヤデ」が用いられにくいこと(例文(13))を、自身の調査データに基づいて指摘している⁵⁾。

(11) *あんたじゃわからんやで, 誰かに聞いてりヤー。(山田2002: 11) 非意志的・否定

(12) *あんたが言い張って考えを曲げんやで, 勝手にしヤー。(山田2002: 11) 意志的・否定 ((11), (12)の「*」は山田の指摘に基づいて安藤により付加した。)

(13) *あんたいっつも働いとるやで, 今日ぐらい休みヤー。(山田2002: 11) 継続相

「トル」が「ヤデ」と共起しにくいことについて、山田(2002: 11)は、「「トル」は最も典型的な状態化形式であり、その意味するところは形容詞に近い内容であるはずだから」、曾根のいう「意志的な行為・動作」とは相容れないために継続相と共起しにくいのだと考えているようである。そこから、「動詞に直接後続する「ヤデ」は聞き手を含む動作者の未実現の意志的行為に対する認識を根拠に、聞き手に行動を促すという用法を持つもの」(山田2002: 11)と

推論している⁶⁾。

山田(2002)の推論にある「聞き手に行動を促す」は、主節の内容に当たる。曾根(2000)でも「ヤデ／ヤニ」の検討に当たって主節が働きかけのモダリティを持つ文のみが取り上げられている。単独の「デ」にはこのような主節の制限はないが、「ヤデ(／ヤニ)」となると「ニ」と同様に主節が働きかけのモダリティを持つことが求められるということになる。これは、野田(1995:224)が「のだから」の特徴として述べている、「文末は単なる事実の述べたてでは不自然であり、判断や命令・依頼、意志などに限られるという文末制限がある」という点と共通するものである。

野田(1995:237f)は、「のだから」について、「話し手が、相手も前件を根拠として後件の判断に至るべきだと考えているにもかかわらず、相手はその判断に至っていない場合に、「のだから」を用いて後件の判断の必然性を示す」ことによって「「のだから」の文は、「非難」とでもいうべきニュアンスを帯びやすい」(同:224)とも指摘している。この「話し手が、聞き手も前件を根拠として後件の判断に至るべきだと考えている」という特徴も、上で述べた「ヤデ／ヤニ」で「聞き手にとって従属節の内容が既知である」という点と共通する。つまり、従属節(前件)の内容は前提として話し手と聞き手の間で共有されており、従属節の内容の予定があるのだから、当然、主節の内容をおこなうように働きかけ、あるいは未だ主節の内容をおこなおうとしない聞き手を非難するというニュアンスが生じうる。

以上の先行研究の検討から、用言に後続する「ヤデ／ヤニ」について、以下のようなことが考えられる。

- ・従属節の主語には聞き手が含まれ、述語は未実現の意志的行為を表す動詞の肯定形である。
- ・「デ」とは異なり、「ニ」と同様に、主節が働きかけのモダリティを持つ場合に限られる。
- ・「のだから」と同様の性質を持ち、従属節の内容は、話し手が聞き手にとって既知であるにとらえているものである。

これを言い換えると、「ニ」は主節が働きかけであるという点で「ヤデ／ヤニ」と共通しているということであるが、「ヤデ／ヤニ」の従属節に「聞き手にとって既知」という特徴があるのに対して、これまで「ニ」の従属節についてはこの特徴は検討されていない。この点については、4節の調査で検討する。

3. 「ニ」の多義性

3.1. 「ニ」の多義性の成立過程

2.1.節で見たように、芥子川(1971)は、名古屋方言の助詞「ニ」にはいくつかの用法があると指摘している。彦坂(2005)は、その成立について次のように述べている。

点在する中部地方のニは地域独自の形式かと思わせるが、国語史にもある。京畿の中古

前後の文献ではニに継起的用法や逆接・順接があり、文脈依存性が高い。中部地方のニも同様である。逆接では、GAJ40 図「植えたのに枯れてしまった」に近畿・関東を中心に広くノニ、対してニが中部地方、中国・四国・九州島北部にある。後述のように古く中国地方にも順接・逆接のニがある。こうしてニ総体としては、かつて中部地方以西に広がったと考えられる。中部地方のニの順接・逆接両用（上の 33 図・40 図）はそうした用法の遺存に違いない。その後、西日本のニは度重なる新興形によって逆接用法だけが残った。中部地方では東部のカラに阻まれ、吹き溜まり的に残存し、両用法が残っている。この位置からしてカラに次ぐものとする。（彦坂 2005: 68）

さらに、彦坂（2005: 68）は、「デ」は、ニ+テ>デとして生じ、「ニの後からこれを塗り替えて」、京畿から東は少なくとも中部地方まで伝播したという考えを述べている。

また、『日本国語大辞典 第二版』（2003）の記述にもとづいて整理すると、次のようになる。「ニ」のもととなるのは【一】格助詞としての用法であり、中古から【二】接続助詞の用法が生じている。【二】接続助詞としての用法の中に、①（イ）並列・前置き・継起などの関係、（ロ）順接条件、（ハ）逆接条件があり、このうち（ロ）が原因・理由に当たる。さらに、【二】②として、「①（ハ）の用法の、下の句を省略したところから終助詞的に用いる。逆接的な余情を含んだ感動や、かすかな不満の気持ちを表わす。主として近世以降の用法。」が挙げられている。諸方言についての記述では、東北から中部地方にかけて逆接の用例が挙げられ、東京都大島のほか長野県・静岡県・岐阜県・愛知県に順接の例が挙げられている。終助詞的な用法については、文末に置かれる類似の形態が東北から九州にかけて挙げられている。

これらの考察および記述をまとめれば、次のようになろう。「ニ」には中古から節同士の論理関係を限定しない接続助詞としての用法が生じ、文脈によって継起・順接（原因・理由）・逆接といった関係で用いられてきた中で、多くの地域では「（ニテ>）デ」が順接を担うなど役割が分化して「ニ」には逆接用法のみが残った。これに対し、中部地方では順接用法も逆接用法も文脈に依存したまま残ったことになる。さらにこの逆接用法が文末で用いられることで、そこに後続するはずの内容を感じさせる終助詞としての用法が生じたということである。

3.2. 順接と逆接

文脈に依存して順接か逆接かが判断されるということは、そのどちらであるのかの判断が難しい場合があることを意味する。例えば、(14) (15) (16) の文を見てみよう。

(14) アブナーニ ユックリ ワタラナイカン

(14) は、例えば足腰が悪い人が道を渡る場合などの「(急ぐと足がもつれて) 危ないから、ゆっくり渡らなければいけない」という順接の意味にも、例えば車の多い道路を渡りながら良い写真を撮ってもらう必要がある場合などの「(さっさと渡らないと) 危ないというのに、ゆっくり

り渡らなければいけない」という逆接の意味にも取ることができる。しかし、順接の解釈は、「ワタライカン」という義務のモダリティの形式で聞き手に向かって働きかける場合にのみ成立するため、文脈によって判断することができるはずである。

(15) サブーニ ホンナトコ オッタラ カゼヒクゾ

(15) は、「寒いから、[そんなところにいると 風邪をひくぞ]」という、後続要素全体とつながる順接の意味にも、「[寒いのに そんなところにいる]と、風邪をひくぞ」という、「オッタラ」という従属節の述語までとのみつながる逆接の意味にもなる。共通語の「ぞ」と同じ終助詞「ゾ」により主節が注意喚起の働きかけの機能を持つために、「ニ」が順接としても使用可能なのであろう。なお、働きかけの内容は同じであるが、ここで示した2つの解釈は、イントネーション句の違いによって表現される。すなわち、順接の解釈は、右枝分かれ構造により、「ホンナトコ」が2つ目のイントネーション句の開始に当たってピッチが上昇するが、逆接では左枝分かれ構造となり、「サブーニ」から「オッタラ」までが一つのイントネーション句をなすことで、「カゼヒクゾ」が2つ目のイントネーション句となる。

(16) サブーニ デテクナ

ところが、(16)の文は、順接で従属節が主節の働きかけの根拠を示し「寒いから、出ていくな。」という意味にもなりうるが、一方で、逆接で主節のモダリティを含まない動詞の意味とのみ結びついて「[寒いのに出ていく]のは、よせ。」という意味にもなりうる。イントネーション上の区別はなく、いずれの解釈でも発話行為として齟齬は生じない。これは2.2.節で曾根(2000)の表1②について述べたことと同じであるが、特にこのように主節が禁止などの否定表現を含む働きかけである場合、否定のスコープを明示する手段がないと、順接と逆接の区別がつきにくい。区別がつかないとしても支障はなく、文構造に関わりなく使うことができる。

3.3. 終助詞としての「ニ」

終助詞用法の「ニ」について、『日本国語大辞典』の【ニ】②の記述は「逆接的な余情を含んだ感動や、かすかな不満の気持ちを表す」とあるが、東濃方言ではどうであろうか。芥子川(1971: 214)による「ニ」の4つ目の用法をふまえて、曾根(2002: 147)は東濃方言による談話の中の文(17)を「涼しかったと言ったよ。いいよねー。」といった意味になると述べ、芥子川(1971)の名古屋方言に関する観察と同様に、「終助詞的な意味も含んでいるが、接続助詞と見られることもできる」ととらえている。

(17) スーシカッタ チッタニ (=涼しかったと言ったよ)

(17)の曾根による訳にも終助詞「よ」が用いられているが、筆者の内省でも、この終助詞用法の「ニ」は、基本的に共通語の「よ」もしくは「ぞ」「ぜ」といった終助詞に近いニュアンスを持つものである。比較した表2に見られるように、話し手の性別が限定されないという

点では「よ」と同じであるが、勧誘のモダリティ（「行こう」／「イコマー」）に後続できないという点では「ぞ」と同様であり、独話では用いられないという点では「ぜ」に近い。

表2： 宮崎他（2002: 265）の表の抜粋による「よ」「ぞ」「ぜ」（上段）と東濃西部方言「ニ」の比較

（○，×は使用・接続の可否を示す。△についての統一的な説明はなされていない。「ニ」の可否判断は筆者の内省による。）

	男女差	独話	雨ですー	雨だー	雨ー	高いー	行くー	行けー	行ってー	行こうー	だろうー	らしいー
よ	—	× ⁷⁾	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ぞ	男	○	△	○	×	○	○	×	×	×	×	○
ぜ	男	×	△	○	×	○	○	×	×	○	△ ⁸⁾	○
東濃西部方言	男女差	独話		アメヤー	アメー	タカーー	イクー	イケー	イッテー	イコマーー	ヤラーー	ゲナー
ニ	—	×	— ⁹⁾	○	×	○	○	×	×	×	×	○

表2から、終助詞用法の「ニ」が接続する節は、命令・依頼（テ形）・勧誘といった働きかけのモダリティを持たないことがわかる。機能については、「ニ」は、話し手が把握している情報を、聞き手に対して主張する「伝達」である（上野 1972; 宮崎他 2002: 265）という点で「よ」「ぞ」「に」の基本的な性質と共通しているが、共感や行動を促す前提として聞き手と確実に情報を共有しようとする場合に用いられる。推量の「ヤラー」（＝だろう）が示すような不確定な情報は、行為を働きかける前提とはなりえないために、「ニ」と共起しないのだと考えられる。

よって、芥子川（1971）が指摘するように「後続することばが省略されている」とすれば、その後続する要素としては、曾根（2000）の言う「いいよねー」のような共感を求める文や、働きかけのモダリティの文が想定されると考えられる。働きかけのモダリティが想定される例としては、(18)の例が挙げられる。ここでは例えば、「私の車に乗りなさい」あるいは「歩いていくのはよしなさい」といった働きかけが想定できよう。

(18) オクッテッタゲルニ (=送って行ってあげるよ)

また、評価のモダリティ形式であって働きかけの形式ではなくとも、終助詞「ニ」が後続することによって働きかけ（命令）の発話行為となる、(19)のような用法もある。これも、「明日は早いから、早く寝る必要がある」という前提を根拠にした、「(だから)早く寝なさい」という従属節と同じ内容の働きかけの主節が省略されているものとして、接続助詞と考えること

も可能であろうが、通常はイントネーションが上昇調をとることから、自然下降調の接続助詞の場合とは区別される¹⁰⁾。

(19) アシタ ハイイデ ハヨ ネナカンニ (=明日, 早いから, 早く寝ないといけないよ)

「ニ」について、『日本国語大辞典』では主節を「省略したところから」終助詞用法が生じたとされるが、主節は省略されるだけでなく、働きかけのモダリティの節が終助詞用法の節に前接する場合もありうる。この場合、原因・理由の従属節の倒置なのか終助詞なのか、判断しにくいことがある。例えば、東濃西部方言で「コッチ イリヤー ヌクターニ」という文は、順接で働きかけの根拠を示し「暖かいからこちらにおいで。」という意味でも、終助詞として「こちらにおいで。暖かいよ。」という意味でも成立する(ただし、前者は自然下降イントネーションを取るが、後者は「ニ」が上昇イントネーションを取る)。このように柔軟に使うことが、山田(2002)の調査における「倒置の場合に「ニ」の許容度が高い」という結果と結びつくのではないだろうか。

以上のように、助詞「ニ」は多義的であり、このことが、順接のうち「原因・理由」とされる用法の許容度にも影響を与えている可能性があるのではないかと考える。特に、主節が否定表現を含む場合には、「ニ」の許容度が上がることを予測する。

4. 「根拠」を表す「ニ」の許容度に関わる要素

前節までの先行研究にもとづく考察から、接続助詞としての「ニ」の使用において主節が働きかけのモダリティであることは必須であると考えられるため、本節では、「主節が働きかけのモダリティである」という条件に当てはまる場合のみについて考察することとし、次の観点を中心に実施した調査について報告する。

第一に、働きかけの程度の強さや種類が「ニ」の許容度に影響するかどうかを検討する。

第二に、「のだから」や「ヤデ/ヤニ」との類似性に基づき、聞き手が従属節の事態を把握しているか否かが「ニ」の許容度に関わるかどうかを検討する。

第三に、逆接との関係で原因・理由の「ニ」が否定の主節と共起しやすいかどうかについて検討する。

なお、山田(2002)の調査結果から、従属節が後置されると「ニ」の終助詞的な働きが関わってくることを予測される。しかし、本稿では従属節と主節のそれぞれの性質のみの影響を検討するため、倒置文は調査対象から除外する。

4.1. 調査方法

調査は2022年3月に主にオンライン形式のアンケートによりおこなった。調査対象者は「東

濃地方の人（出身・在住）」と比較的緩やかに設定し、質問に小学生の時の居住地を含めた。回答者の78.4%は東濃西部に当たる多治見市・土岐市・瑞浪市の出身であり、10.3%は東濃東部に当たる恵那市・中津川市の出身であった。「その他」に該当する回答者には、多治見市に隣接する可児市や中濃地域の出身者ならびに大人になってから東濃在住となった人が含まれる。

表3：出身地別回答者数（人数）

多治見	土岐	瑞浪	恵那・中津川	その他・無回答	合計
41	17	18	10	11	97

回答者は97名であり、その内訳は表4のとおりである。調査方法に起因すると思われる偏りがみられる。

表4：年代・性別回答者数（人数）

	生年	男性	女性	無回答	合計
青年層	2003-2012	1			1
	1993-2002	1	1		2
	1983-1992	2	1		3
中年層	1973-1982	3	25		28
	1963-1972	17	16	1	34
高齢層	1953-1962	3	3		6
	1943-1952	7	12		19
	1933-1942	3	1		4
	合計	37	59	1	97

4.2. 調査文

調査文の共通語訳は示さず、それぞれの状況の中で各調査文がどのくらい自然に感じられるかを問う形式とした。読みやすさを考慮し、表記は共通語と同様の漢字かな混じりとした。回答者の対象はなじみのある表現として「東濃地方」としたが、調査文を作るうえで東濃西部と東部に共通した表現のみを用いることは難しいため、東濃西部方言で一般的な表現を用いた。方言での会話のイメージがつかみやすいように方言的な要素をある程度含めつつも、広い世代・地域の話者に文意が理解できるよう、方言特有の表現を必要以上に含めないように留意した。ただし、東濃西部で働きかけのモダリティとして盛んに用いられる「-ヤー」（尊敬の助動詞「-ヤース」の命令形）、「-ヤースナ」（尊敬の助動詞「-ヤース」の禁止の形）は、取り入れた¹¹⁾。

調査文のうち、4文は文脈なしでそれぞれの自然さを尋ね、9文は2つの文脈においてそれ

ぞれの自然さを尋ねた。なお、筆者にとっては、いずれも何らかの文脈では使用可能な文である。

文脈なしで尋ねた4文は、「から」の慣用的用法に相当する「頼むニ」(a) (b)、および理由以外の用法に相当する「すぐ来ルニ」(c) (d)について、それぞれ主節が肯定の場合((a) 依頼, (c) 命令)と否定の場合((b) 否定依頼, (d) 禁止)を尋ねたものである。

(a) 頼むに、車、貸して。(=頼むから、車を貸して。)

(b) 頼むに、大声出さんといて。(=頼むから、大声を出さないで。)¹²⁾

(c) すぐ来るに、待っとれ。(=すぐ来るから、待っている。)

(d) すぐ来るに、泣くな。(=すぐ来るから、泣くな。)

(e) から(m)の9文には、それぞれ、従属節の内容を発話以前から聞き手が知っているという文脈(【既知文脈】)と従属節の内容を聞き手がそれまで知らなかったという文脈(【未知文脈】)を与え、それぞれの場合の自然さを尋ねた。各文脈における聞き手の設定は、働きかけをしやすい相手として、家族の構成員や「子ども」とした。「既知」の場合、共通語訳では「のだから」としたほうが適切な場合があるが、以下では「から」に統一して訳を示す。訳の後に、主節の働きかけのモダリティ形式の種類を示す。

(e) たくさんあるに、好きなだけ取ってええよ。(=たくさんあるから、好きなだけ取っていいよ。)[許可]

【既知文脈：たくさんあるお菓子を、孫の前にぜんぶ並べて言う場合】

【未知文脈：お菓子の一部を、孫の前に出した時に言う場合】

(f) 米はあるに、買わんでええよ。(=米はあるから、買わなくていいよ。)[不必要]

【既知文脈：先週も米を買ってきた家族に言う場合】

【未知文脈：米が残り少なくなっていると思っている家族に言う場合】

(g) あした早いに、はよ寝やあ。(=あしたは早いから、早く寝なさい。)[指示]

【既知文脈：あした部活の遠征のために早起きするつもりの息子に言う場合】

【未知文脈：あした家族で遠出するために早起きする必要があることを知らない息子に言う場合】

(h) パンツの替えがないに、買ってりゃあ。(=パンツの替えがないから、買っておいで。)[指示]

【既知文脈：自分のパンツの枚数がわかっている家族に言う場合】

【未知文脈：パンツの管理を人に任せている家族に言う場合】

(i) 熱中症になるといかに、水、飲みゃあ。(=熱中症になるといけないから、水を飲みなさい。)[指示]

【既知文脈：熱中症予防に水分が必要だと知っている娘に言う場合】

【未知文脈：熱中症予防について理解していない娘に言う場合】

- (j) その卵、古いに、食べやあすな。(=その卵は古いから、食べるのはよしなさい。)[抑止]
【既知文脈：卵の賞味期限が先週だと知っている夫に言う場合】
【未知文脈：卵が新鮮だと思っている夫に言う場合】
- (k) 台風が来るに、レインコート持って行け。(=台風が来るから、レインコートを持って行け。)[命令]
【既知文脈：天気予報を見ていた息子に言う場合】
【未知文脈：天気予報を見ていない息子に言う場合】
- (l) 床が濡れとるに、すべって転ぶなよ。(=床が濡れているから、滑って転ぶなよ。)[禁止]
【既知文脈：水浸しの雑巾で体育館を掃除した子どもに言う場合】
【未知文脈：帰宅したばかりで、雨漏りしていることを知らない子どもに言う場合】
- (m) 赤ん坊が寝とるに、大声出すな。(=赤ん坊が寝ているから、大声を出すな。)[禁止]
【既知文脈：赤ちゃんが寝ている様子を見て、はしゃぐ子どもに言う場合】
【未知文脈：隣の部屋にいる赤ちゃんを見ていない子どもに言う場合】

選択肢は「まったく自然」「まあまあ自然」「やや不自然」「まったく不自然」の4択とした。先行研究から「デ」の使用が多いことが強く予測される中で、「ニ」が可能な場合について調査するため、「自分がどう言うか」ではなく、「ニ」の自然さを問う形とした。

4.3. 結果の概要

本節では、全調査文について、回答者の属性（年代・性別・出身地）別の結果を見る。

選択肢を次のように点数化し、回答者の属性ごとの平均を許容度とする。

「まったく自然」=1点

「まあまあ自然」=0.5点

「やや不自然」=-0.5点

「まったく不自然」=-1点

全調査文に対する全回答者の許容度は0.32であった。以下、属性ごとに比較を行う。

まず、性別により比較すると、男女とも許容度0.32であり、性別による違いは認められない。

次に、回答者の年代別に比較するには年代ごとの回答者数の偏りが大きいという問題はあるものの、おおよその傾向をつかむために結果を図1に示す。表4の区分で相当数の回答者数が得られた高齢層全体と中年層全体を比較すると、高齢層(0.41)の方が中年層(0.27)より高い許容度を示す傾向が見られた。とはいえ、最も低い世代でも正の値を取っており、特に若いほど許容度が下がって「ニ」が衰退しているといった明確な状況は認められなかった。

東濃方言における順接の接続助詞「ニ」の使用傾向に関する検討

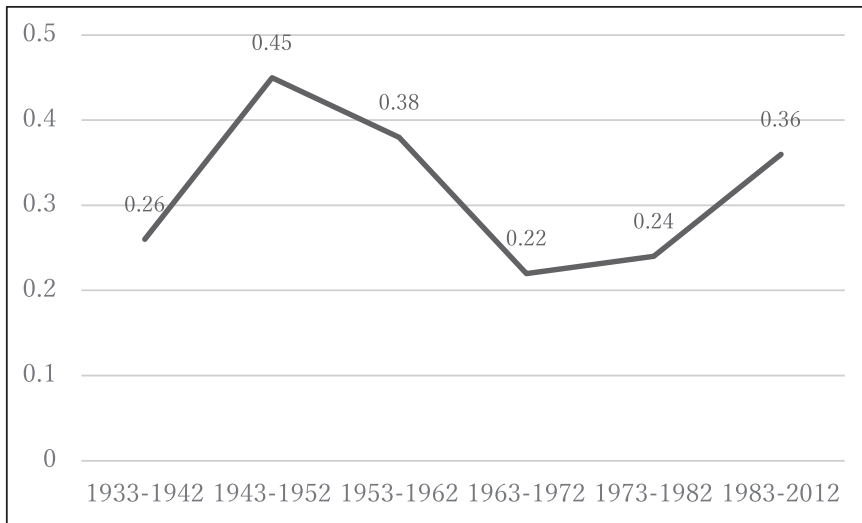


図1：全調査文に対する年代別の許容度（横軸：生年，縦軸：許容度）

さらに、回答者の小学生時代の居住地により出身地を整理すると、図2のようになる。東濃西部では瑞浪市がやや低い許容度となった。東濃東部の恵那市と中津川市では、質問文が東濃西部の表現であるにもかかわらず、許容度は低くならなかった。

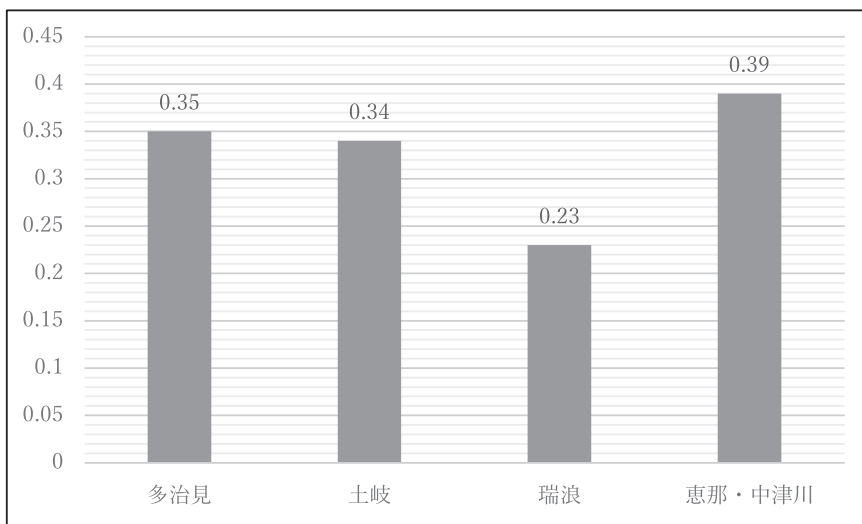


図2：全調査文に対する出身地別の許容度

なお、アンケートの末尾に付した自由記述欄には、「中津川では「に」ではなく「で」と言う」(中津川市出身者)、「「に」を使うのは駄知(土岐市東部)の方でしょうか? 地域的かと思いました」(土岐市出身者)、「基本的に「に」は恵那市や中津川市の方言で、土岐や多治見の人はあまり使いません」(土岐市出身者)など、一部の調査文に「まったく自然」「まあまあ自然」の回答をした人でも、自分の地域ではなく近くの別の地域の言い方ととらえている意見が見られた。

4.4 慣用用法と理由を表さない用法

ここから、各調査文について結果を検討する。まず本節では、2.2節で見た山田(2002)から高い許容度が予想される(8)「[から]の慣用用法」(以下,[慣用])に相当する調査文(a)(b)と、(7)「理由を表さない用法」(以下,[非理由])に相当する調査文(c)(d)の結果を見る(図3)。

(a)(b)では「慣用」として、「頼ムニ」の自然度を問うた。ここでは、高い許容度を確認するねらいがあったが、実際の結果としては、主節が肯定依頼の「車、貸して」では許容度が比較的低く(0.27)、否定依頼の「大声出さんといて」のみの許容度が高い(0.52)という結果であった。この違いは、主節の内容が肯定依頼か/否定依頼かによる可能性がある。「慣用」全体の許容度は0.39であった。

次に、(7)のような「非理由」の(c)(d)「スグ来ルニ」では、逆に主節が否定(禁止)のほうがやや許容度が低い結果となった。この原因は不明であるが、(d)では「スグ来ルニ」の主節「泣クナ」の根拠とする関係がつかみにくいものであったことが考えられる。

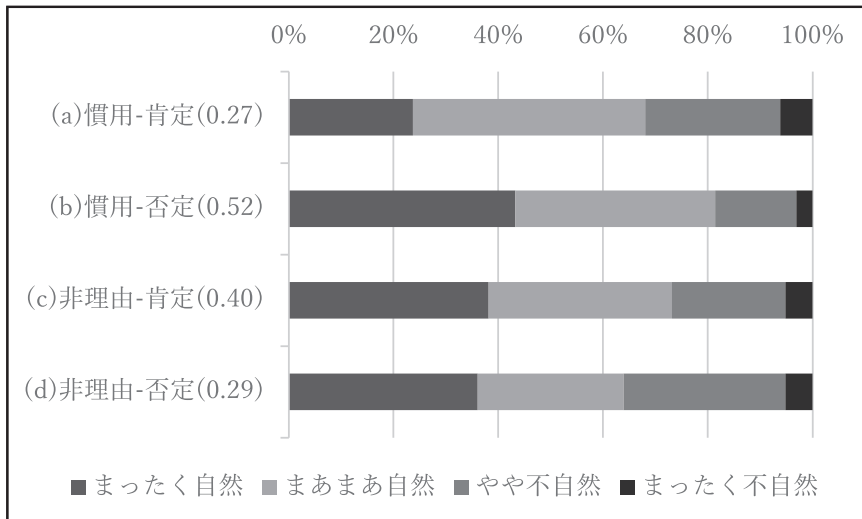


図3: 「慣用」 「頼ムニ」 / 「非理由」 「スグ来ルニ」と肯定/否定の主節の許容度

4.5. 働きかけの根拠の「ニ」

本節では、山田(2002)の挙げた(9)[発言・態度の根拠](以下,[根拠])に相当する,残る9の調査文について検討する。[根拠]に相当する調査文(e)-(m)のそれぞれ2つの文脈における結果の許容度は,総合すると図4に示すとおりであり,[慣用],[非理由]と比べるとやや低い許容度(0.31)ではあるが,彦坂(1991:27)や山田(2002)の調査結果から予想されるほどの明確な相違は見られなかった。

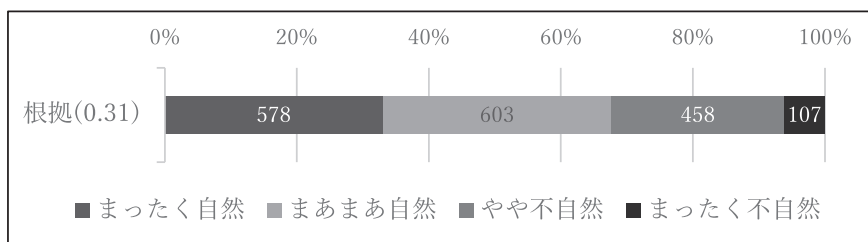


図4:[根拠]全体(調査文(e)-(m)各2場面)の許容度

次に,[根拠]の9文を主節のモダリティ形式によって比較するが,同時に肯定/否定の形式も図5で合わせて検討する。

モダリティ形式による働きかけの強さは,一般に,肯定の系列では許可<指示<命令,否定の系列では不必要<抑止<禁止,という順に後方ほど強くなると考えられる。それぞれに対応する調査文の許容度を比較すると,許可(0.20)<指示(0.30)<命令(0.39),不必要(0.25)<抑止(0.33)<禁止(0.36)となり,形式上の働きかけが強いほど「ニ」の許容度が増していることが確認された。

一方,肯定の系列と否定の系列を比較すると,許可(0.20)<不必要(0.25),指示(0.30)<抑止(0.33)においては否定の系列がやや高い許容度を示すが,命令(0.39)>禁止(0.36)では逆の結果となった。

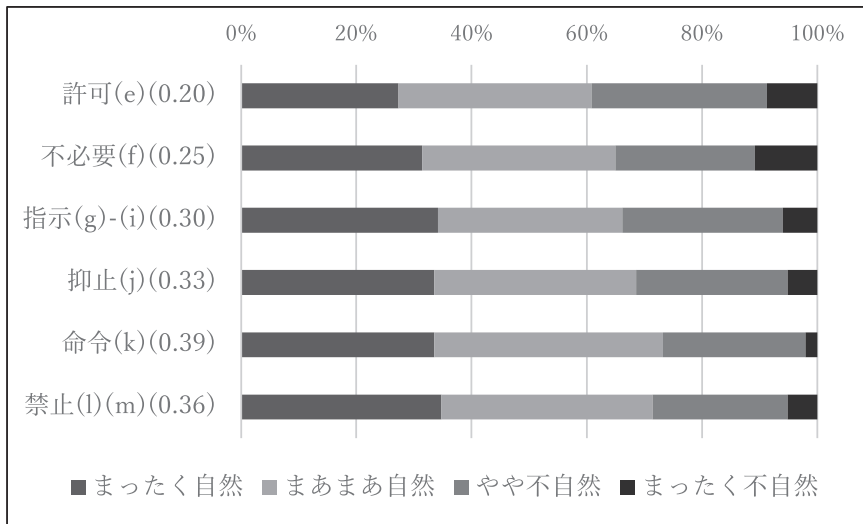


図5：主節のモダリティ形式・肯定／否定形式

次に、従属節の内容が聞き手にとって既知であるという想定での発話か、未知であるという想定での発話か、という文脈による違いを検討する。9の調査文の2場面（文脈）を総合して比較した結果を図6に示す。聞き手にとって従属節の内容が既知である場合、許容度は0.38、未知の場合0.24となり、既知であるほうが許容されやすいと考えられる結果となっている。

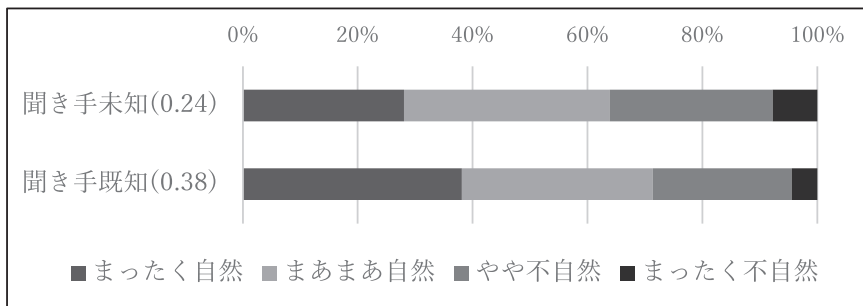


図6：従属節の内容の聞き手にとっての既知／未知（全体）と許容度

この結果を各調査文に分けてみると（図7）、既知／未知の違いがこの全体の傾向に沿う文(e)(g)(f)(m)と、既知／未知に影響を受けない文(i)(l)(j)(k)、逆の結果になる文(h)とがある。

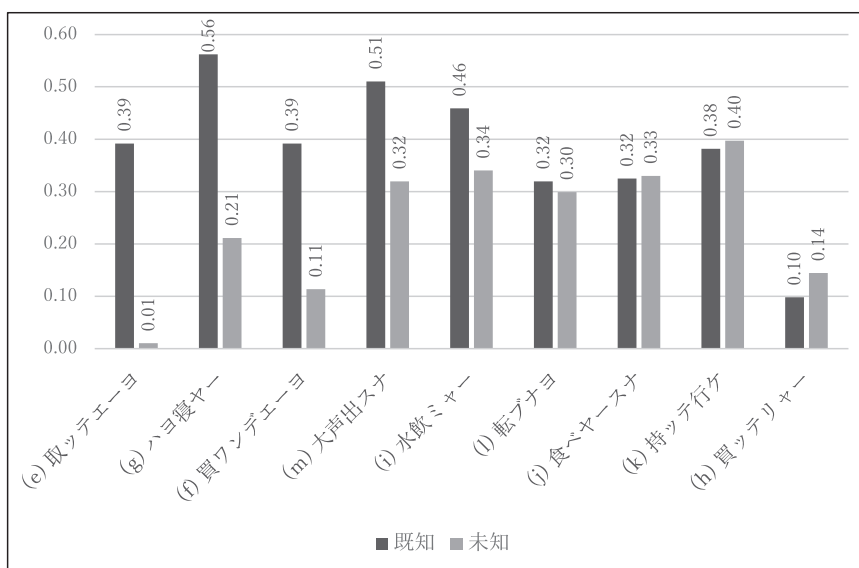


図 7：従属節の内容の聞き手にとっての既知／未知（調査文別）と許容度

(e) (g) (f) (m) では、既知／未知で比較的值の差が大きく、この違いが影響していると考えられる。(h)「パンツの替えがないに、買ってりゃあ。」は、既知（聞き手は自分のパンツの枚数がわかっている）でも未知（聞き手は自分のパンツの管理を人任せにしている）でも許容度が低いが、自由記述欄に「特にパンツのところで状況を理解するのが難しかった」という意見があったことから、調査文が適切でなかった可能性がある。

一方、(i) (l) (j) (k) は未知の場合も比較的許容度が高いため、既知の場合との差が出ていない。この4文は、主節のモダリティ形式は (i) 指示、(l) 禁止、(j) 抑止、(k) 命令であるが、発話行為としては、聞き手自身に健康上の問題が生じることを予防するための注意喚起であるという共通点がある。(i) は古い卵を食べて腹痛を起こさないように、(l) は濡れた床で滑って転んで怪我をしないように、(j) は熱中症にならないように、(k) は台風でずぶ濡れになって体を冷やさないように、という注意喚起である。一方で (g)「あした早いに、はよ寝やあ。」も、寝不足になるという健康上の問題を予防する注意喚起であるという解釈も可能であるが、単に寝坊や遅刻という事態を避けるための注意喚起とも解釈可能であり、アンケートにおいて回答者がどのようにとらえたかは不明である。

なお、特に聞き手の健康上の問題と関わりのない (m)「赤ん坊が寝とるに、大声出すな。」においても、既知だけでなく未知の文脈でも許容度が比較的高い。この文がモダリティの形式上のみならず実質的に禁止という強い働きかけの機能を持つことを考え合わせると、聞き手に行動を促す前提として内容を確実に把握させたいという、3.3.節で検討した終助詞用法にも見

られた「ニ」の特徴が反映されている可能性が考えられる。

5. まとめ

本稿では、先行研究における接続助詞「ニ」の記述をもとに、その用法上の制限について、主節が働きかけのモダリティを持つという制限のほかにもどのような条件があるかを検討した。用言に接続する「ヤデ／ヤニ」との共通性から、従属節の内容が聞き手にとって既知であるという制限を予測した。さらに、「ニ」の多義性から、否定形との関係について考察をおこなった。

予測を確かめるべくおこなったアンケート調査では、順接の「ニ」と否定形との関係については明確な結果は得られなかった。一方、発話行為として聞き手への健康上の注意喚起等を行う場合を除いては、従属節の内容を聞き手が理解している場合に働きかけの根拠を示す「ニ」の許容度が上昇することが明らかになった。

では、なぜ特に健康上の注意喚起を行う場合には、聞き手にとって未知であっても「ニ」の許容度が高いのか、というのは興味深く、残された課題である。これについては、聞き手にとって従属節の内容が発話時点で既知であろうと未知であろうと、「聞き手自身に関わることとして従属節の内容を確実に把握し、主節の働きかけに従ってほしい」という親身な態度の表れではないかと推測する。本稿の範囲では十分な調査はおこなえていないが、健康などに関する不利益への注意喚起とそれに該当しない働きかけを比較することにより、明らかにできる問題であろう。

回答者の中には、ほとんどの調査文に対して「まったく自然」と答える人や、逆にほとんどの調査文に「まったく不自然」と回答する人も見受けられ、人によって差はあるものの、全体としては、2022年現在で順接の接続助詞としての「ニ」の用法が受け入れられていることを確認した。

注

- 1) 本稿では「モンデ」については扱わないが、小田(2016)や山田(2002)などにおいて「デ」との異同が論じられている。
- 2) 訳文にも「に」がそのまま用いられているが、芥子川(1971: 214f)の記したままである。
- 3) 曾根(2000)は「ヤデ」と「ヤニ」の違いについても整理しようとしているが、話し手と聞き手との関係や語感の強さなどに関する被験者の主観的な意見に基づくものであり、本稿では参考としない。
- 4) やや共通語化した印象がある方言形として、「出カケル_ニヤデ/_ニヤニ」のように準体助詞「の」に当たる「_ニ」を挿入した形がある。「_ニ」を挿入しても(9)と同じ意味である。
- 5) 曾根(2000)では、継続相「トル」でも継続相「ヨール」でも、「ヤデ」は使用可能であるのに対して「ヤニ」は使用できないという調査結果が示されているが、これは、曾根自身も指摘しているように、そもそも「ヤニ」の使用が少ないことが原因となっている可能性がある。山田(2002)の主張と合わせて考えるならば、継続相には「ヤデ」「ヤニ」のいずれも使いにくい、「ヤニ」はそもそも「ニ」の頻度が低いために、自然度が一層低く感じられるものと推測される。

火使ットル／使ヨールヤデ, 火事ニナランヨ一ニシヤ一ヨ (曾根 2000: 155)

* 火使ットル／使ヨールヤニ, 火事ニナランヨ一ニシヤ一ヨ (曾根 2000: 155f)

(=火を使っているから, 火事にならないようにしなさいよ)

- 6) 筆者の感覚では, 山田 (2002) の指摘するとおり, 「ヤデ／ヤニ」は未実現の意志的行為につくものであるが, 状態性の問題というよりは, 「ヤデ／ヤニ」が「～する予定なのだから」という意味合いであるためであると思われる。つまり, 聞き手が把握している予定を話し手が聞き手に確認させるという意味である。この点については稿を改めて論じたい。
- 7) 「よ」は独話では用いられないとされるが, 宮崎他 (2002: 266) で「あれっ, 待てよ」のような例もあるが, 例外的である。」として独話での例外的な用法を挙げている。
- 8) 「だろう」+「ぜ」は, 日本語記述文法研究会編 (2003: 240) によれば「○」である。
- 9) 「ニ」だけでなく, この方言全体が丁寧形と共起しにくい。
- 10) 何度言っても聞き手が早く寝ない場合, 自然下降調で「早く寝なければいけないんだから (早く寝なさい) (理由) もしくは「早く寝なければいけないのに (遅くまで起きているとはけしからん) (逆接) の意味で, より厳しい働きかけとして言うことはありうる。
- 11) 「-ヤ一」「-ヤースナ」はともに尊敬の助動詞「-ヤース」の活用形であるが, 命令／禁止という働きからか, 通常尊敬語を使う相手に対しては用いられにくい。男女を問わない友人同士や, 女性から同等の関係もしくは目下に対して指示する場面でよく用いられる。実質的な命令／禁止のほか, 指示／抑止, 勧奨／注意喚起といった発話行為においても用いられ, 「行ケ」「行クナ」といった命令形／禁止形よりは優しく, 気遣いのある印象がある。ここでは命令形／禁止形との区別のため「-ヤ一」を「指示」, 「-ヤースナ」を「抑止」としておく。元となる助動詞「-ヤース」は名古屋方言から流入したとされており (奥村 1976: 274f), 東濃方言に多くの尊敬語のバリエーションがある中で, 比較的新しく, 若い世代でも聞くことがある形ではあるが, 東濃東部での使用状況は現在のところ不明である。なお, ここでは「-ヤース」などと表記するが, 五段活用動詞では語幹末子音に /jaRsu/ が後続し, 例えば「行キヤース /ik-jaRsu/」「出シヤース /das-jaRsu/」のように拗音になる。
- 12) 調査文 (b) の「大声出さんといて」の「ダサントイテ」を逐語訳的に共通語に直訳すれば「出さずにいいて」となるが, 意味するところは単に「出さないで」という依頼である。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP19K00600 の助成を受けたものである。あわせて, 調査にご協力いただいた東濃地方の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 上野田鶴子 (1972) 「終助詞とその周辺」日本語教育学会編『日本語教育』17: 62-77
- 大西拓一郎編 (2016) 『新日本言語地図』朝倉書店
- 奥村三雄 (1976) 『改訂増補 岐阜県方言の研究』大衆書房
- 小田佐智子 (2016) 「岐阜方言の原因・理由に表れるモンデ」大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室編『阪大社会言語学研究ノート』14: 67-75
- 芥子川律治 (1971) 『名古屋方言の研究—江戸時代編—』泰文堂
- 国立国語研究所 (1989-2006) 『方言文法全国地図』大蔵省印刷局
- 曾根彩恵子 (2000) 「岐阜県東濃 (土岐市) 方言の接続助詞「デ」と「ニ」の用法」名古屋・方言研究会編『名古屋・方言研究会会報』17: 141-158
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『モダリティ』くろしお出版
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2003) 『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 野田春美 (1995) 「「のだから」の特異性」仁田義雄編『複文の研究 (上)』くろしお出版 pp. 221-245

- 蓮沼昭子・有田節子・前田直子(2001)『日本語文法 セルフマスターシリーズ7 条件表現』くろしお出版
- 彦坂佳宣(1991)「東海西部地方の原因・理由表現 愛知県方言の分布と歴史ノート7」名古屋・方言研究会編『名古屋・方言研究会会報』8: 23-33
- 彦坂佳宣(2000)「西部日本における原因・理由表現の分布と歴史—『方言文法全国地図』の解釈—」立命館大学日本文学会編『論究日本文學』72: 1-16
- 彦坂佳宣(2005)「原因・理由表現の分布と歴史:『方言文法地図』と過去の方言文献との対照から」国立国語研究所編『日本語科学』17:65-89
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1975)「東海の方言」大石初太郎・上村幸雄編『方言と標準語—日本語方言学概説』筑摩書房 pp. 247-263
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 山田敏弘(2002)「美濃方言の原因・理由表現」岐阜大学教育学部編『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』51 (1) : 1-21
- 山田敏弘(2006)『ぎふ・ことばの研究ノート第5集 東濃方言資料に見られる文法項目』岐阜大学教育学部国語教育講座